



日本藻類学会 学会賞（特別賞，学術賞，第 21 回研究奨励賞， 第 28 回英文誌論文賞，第 1 回和文誌論文賞， 第 49 回大会学生発表賞）

【日本藻類学会 学会賞 受賞記念特集】

日本藻類学会第 49 回大会（沖縄）において、2025 年 3 月 22 日（土）に特別賞，学術賞，研究奨励賞，英文誌論文賞，和文誌論文賞の授賞式が、3 月 23 日（日）に学生発表賞の授賞式が行われ、受賞者と受賞論文が発表された。各賞の概略的な内容と選考方法については日本藻類学会のウェブサイト参照されたい。特別賞（岡村賞）が奥田一雄氏，学術賞（山田賞）が藤田大介氏，研究奨励賞が鎌倉史帆氏と関荘一郎氏，英文誌論文賞が Arai *et al.* の「Field survey of the phase and sex ratios of the brown alga *Dictyota dichotoma* (Dictyotales, Phaeophyceae) using sex-specific molecular markers. Phycological Research 72(2): 123–132, DOI: 10.1111/pre.12544」，和文誌論文賞が貞包らの「同形世代交代型紅藻ツノマタ属 2 種における生態と物理特性の世代間比較. 藻類 72(3): 157–163」であった。学生発表賞は、口頭発表の大型藻の部が鶴亀里咲氏，微細藻の部が城間尚氏，ポスター発表は大型藻の部が植木理子氏，微細藻の部が中村翠氏と森本冬海氏であった。

日本藻類学会特別賞（岡村賞）を受賞して

奥田 一雄（高知大学名誉教授）

このたびは私に日本藻類学会特別賞（岡村賞）を授与していただきましてまことにありがとうございます。今回このような名誉ある特別賞（岡村賞）を賜り、私自身、大変光栄かつ誇りに思っているところです。日本藻類学会そして学会員の皆さま方に対し、心から深く感謝とお礼を申し上げます。

ところで、私は 1978 年に日本藻類学会に入会して以来、今年 2025 年で 48 年目となりました。私は藻類学会の中で、駆け出しの大学院生のときから若手、中堅へと年齢・キャリアを重ねていく間に、尊敬する先生や諸先輩方をはじめ多くの素晴らしい同僚研究者と出会い、たくさんのご指導・ご鞭撻をいただきました。私は日本藻類学会から数々の恩恵を受けつつ、それと同時にこの日本藻類学会によって育てられてきました。つまり、私の研究者としてのアイデンティティを実現するためになくてはならない人々との出会いと場、それが日本藻類学会であったのではないかとつくづく実感しています。

今回の日本藻類学会特別賞（岡村賞）受賞に関し、和文誌

編集委員会の芹澤和世さんから寄稿のご依頼をいただきました。この機会に、私が藻類の道へ進むことになったいきさつを、非常に個人的な内容となりますが、まずは思いつくままに回想しました。後半では、私が藻類学会の英文誌の副編集長と編集長を務めていた時期の思い出を、これもかなり自己中心的な視点から見た内容となりますが、記述させていただきました。

私は神戸大学の 2 回生の後期に教養部から理学部生物学科へ無事（落第せず）に専門移行し、「藻類学総説」を著された広瀬弘幸先生による通年 4 単位必修の「系統生物学」を受講したことで、藻類という生物の存在をはじめて認識したのではないかと考えています。臨海実習では、海藻標本作製の最中、出し抜けにひょいっと広瀬先生が実習室に入ってきて、標本用紙の上でまだ水切りしている海藻を指さしながら、これはマクサでこれはアマジグサなどと次々にぱっぱっと歩きながら名前を付けていかれるので、学生は不意を突かれて鉛筆書きが追いつかないくらいでした。

卒論分属のとき、広瀬先生はその年度末に定年退職されましたが、私は漠然と系統学教室を希望していました。しかし、黄金色藻の高橋永治先生と、淡水紅藻と珪藻遺骸の熊野茂先生の研究室はいずれも学生に大人気で、すでに満席。結局、淡路島の岩屋臨海実験所におられた榎本幸人先生にお願いし、私の卒論指導を引き受けていただきました。このことは、結果的に私が藻類の道へ進んでいく大きな選択となりました。

4 月から私は修士 1 年生の奈島弘明さんと一緒に本部六甲台から離れた臨海実験所で自炊し、寝泊まりする生活を始めました。榎本先生は実験所の敷地内にある官舎で奥さまと一緒に住まれ、食事と睡眠をとられる以外は実験所で研究されていました。それゆえ、2 人の学生はほとんど四六時中榎本先生と顔をつきあわせ、研究面だけにとどまらず生活面や人生観にまでわたる多種多様な指導を受けている状況でした。



私の卒論テーマはミドリゲ目多核緑藻キッコウグサの生活史に関する研究でした。6月に奈島さんと一緒に奄美大島へ行って採集してきたキッコウグサを生きたまま実験所に持ち帰りました。さっそくキッコウグサを粗培養すると、数日で遊走細胞を放出したので、その遊走細胞の雌雄性の有無や鞭毛の数などを顕微鏡で観察・撮影・スケッチしました。また一方で、走光性を利用して分離した遊走細胞を培養しました。私は榎本先生がされることを全部見よう見まねでそのままフォローし、手取り足取り一つひとつの手技とその理由、意味を教えてくださいました。私にとってそれら個々の実験と理に適った手技・技法はとても新鮮に感じられ、しかもそれを実体験したことで私の知的好奇心はよりいっそうかき立てられました。

卒論の目的は、生殖、発生、成長、形態形成を含むキッコウグサの生活史を培養によって明らかにすること。生活史を単に世代交代のタイプ分けというような狭い意味で捉えるのではなく、キッコウグサの生き方全体をつぶさに理解するという研究視座を榎本先生から学びました。たとえば、同型世代交代において、雌雄の配偶子から単為発生した個体と、接合子または遊走子から発達した個体との間に形態的・生理的差異が生じるのだろうかとか、雌雄の配偶子は光の方向へ泳ぐが、それらが接合して接合子になるやいなや光と逆の方向へ泳ぎを反転させるのは、細胞構造の変化か、もしくは光の異なる因子が関与するのだろうか、などと問うのです。このような問題意識を持てたのは、温度や光、栄養塩の組成などの条件を任意に設定し、海藻類を長期間培養する技術的な基盤がそのころに確立されてきた背景があったと思います。このような生物現象やものごとの捉え方は私自身の研究スタンスと発想法に大きな影響を与えました。そして現在に至るまで、私は培養を基本に藻類の成長と分化、形態形成に関わる構造要素および生理学的特性を明らかにすることに興味をもち続けているのです。

ところで、榎本先生はそのころ堀輝三先生と多核緑藻の核分裂や生殖細胞の微細構造について共同研究されていました。両先生のそのような関係から、榎本先生は私と奈島さんを連れて1週間ほど東邦大学に滞在し、そこで堀先生から電子顕微鏡の試料作製法を逐一教えていただきました。キッコウグサの細胞の固定、脱水、樹脂包埋、そして超薄切片の作製と電子染色、電子顕微鏡観察と撮影、フィルム現像・印画紙への焼き付けまで、行うべき処理と段階があまりにも多くて細かい作業ばかりであることに驚きました。なお、堀先生の隣の研究室には吉崎誠先生がおられました。吉崎先生の卒論生らが顕微鏡観察しながら黙々とスケッチしていましたが、その図を見せてもらおうと、紅藻類の果胞子体発達の種々の段階における各細胞の配置と連結が三次元的にかつ非常に精緻に表現されており、まるで芸術作品のようだと思いました。

さらにまた、筑波大学下田臨海実験所の横浜康継先生を訪ね、キッコウグサの光合成を測定させていただきました。暗室の実験室内では、光源のスライドプロジェクターとプロダ

クトメーターを一对のワンセットとしてテーブルに一直線上に配置し、両者間の距離を調整してプロダクトメーター上の試料に照射する光量を設定できるようになっていました。実際の実験では、それぞれ異なる光量に設定した上記のセットを複数列平行に並べ、それらを同時に稼働してキッコウグサの光合成を測定しました。そのようなすこぶる合理的で効率的な方法が考案・実現されていることに感服しました。

卒論研究の約1年間にあったこのような数々の濃い楽しい経験をもとに、私は大学院への進学を決心しましたが、すでに大学院の試験は終わっていました。それで榎本先生に相談してアドバイスをいただき、神戸大学を卒業後、まず研究生として北海道大学理学部に入学し、室蘭にある同附属海藻研究施設(海藻研)で約半年間受験勉強をすることになりました。海藻研には、施設長の阪井與志雄先生、館脇正和先生、笠原和男先生、1名の事務官と2名の技官、そして博士課程の3人の大学院生、渦鞭毛藻の内田卓志さん、附着珪藻の水野真さん、褐藻の嵯峨直恆さんがおられました。その秋、無事に大学院の入学試験に合格したことを機に、私は1978年から藻類学会へ入会しました。

修士課程に入学すると、私はそのまま室蘭の海藻研にりましたが、札幌の植物分類学教室にいる川井浩史さんとは同期でした。その翌年には、修士1年生で本村泰三さんが海藻研に入ってきました。奇しくも川井さんと本村さんと私の3人は同い年(生まれた年度・学年が同じ)だったのです。修士課程では、私は館脇先生の指導の下で緑藻ニセハネモ属の1種的生活史と配偶子形成の制御機構に関する研究をしました。ちなみに、館脇先生と榎本先生のお二人は北大理学部植物学科の同期生でした。私が藻類の道に進んだ(大学院生になる時点までの)きっかけは、概ね以上のような経緯でした。

その後の私は博士後期課程2年生を終えて高知大学に採用され、細胞壁の構造と形成に関する研究へと移行しました。1990年から2年間は米国テキサス大学オースティン校のDr. R. M. Brown, Jr. の研究室でセルロースの *in vitro* 合成について研究しました。同校の植物学棟には *Volvox* と UTEX の Dr. Richard C. Starr がおられ、近くの池の端でパンをちぎって魚に給餌されているのをよく見かけました。

一方、そのころの藻類学会では、学会の活性化のため、改革ワーキンググループ等で活発な議論が行われていました(Jpn. J. Phycol. 41: 180-181, 1993)。そこで出てきたいくつかの企画・提案、たとえば、学会予算の収入増のための藻類グッズ製作・販売など、がすでに実行されつつありました(Jpn. J. Phycol. 42: 456, 1994)。かくして藻類学会は、学会誌の国際化という目標を実現するため、1995年に英文誌 *Phycological Research* (PRE) をブラックウェルという学術出版社から発刊しました。これにより藻類学会の学会誌に係る予算の多くはPREのために支出されるようになったので、同時に新たにスタートした和文誌「藻類」の出版は、限られた予算の中で様々な工夫がなされながら、もっぱら和文誌編集委員会委員のボランティア活動によって支えられました。それだけに、創生

当時の PRE は、藻類学会からの大きな支援と期待に応えるべき責任と成果が望まれていました。

私は 1997 年から PRE の副編集長を 6 年間務めた後、2003 年から 2006 年までの 4 年間 PRE の編集長に就任しました。私は懸案事項であった PRE のインパクトファクター (IF) 獲得に取り組みました。なぜなら、IF のない学術雑誌に良い論文を投稿してくれる研究者は実際非常に少ないからです。そのような状況にもかかわらず、前任の川井、本村両編集長をはじめ、副編集長や他の藻類学会員からも国内外の研究者に向けて粘り強く PRE への投稿依頼を継続しました。それに加え、ブラックウェルは国際学会での PRE の宣伝活動や、PRE 掲載論文の関連雑誌への引用回数を含む独自の調査と広報活動等を行ってきました。PRE の発刊以来行ってきたこのような地道な取組は、IF 獲得のための申請に必要かつ有効でした。2004 年 1 月に、私は PRE の目的、歴史的背景、編集体制、著者・出版実績、国際学会誌としての評判・引用情報などを記載した資料とともに、Thomson ISI の Ms Marion Gloninger 宛へ PRE を ISI Current Contents に登録するための申請を行いました。そのときに推薦書を書いていたのは、国際藻類学会会長・Protist 編集長の Dr. Michael Melkonian、European J. Phycology 編集長の Dr. Christine A. Maggs、日本植物学会会長の黒岩常祥先生、カリフォルニア大学バークレー校の Dr. Paul C. Silva、メルボルン大学の Dr. John A. West でした。Thomson ISI による半年余りにわたるレビューの結果、2004 年 8 月に待ちに待った申請受理の連絡があり、2006 年について PRE にとって初の IF が出たのでした。私は発刊 11 年目にしてやっと PRE が本当に国際学会誌となったという認識を持つことができ、感慨無量でした。IF 獲得のため、ブラックウェルの松永理乃さんと Ms Katie Julian に大変尽力いただきました。私の任期中、お二人には PRE の用紙価格と郵送費の低減につながる印刷紙の選定や duotone 印刷の維持、ページ超過分の減額などで多々お世話になりました。近々 PRE の冊子体がなくなるという由、私が PRE 編集長をしていた頃とは隔世の感があります。

さて最後の話題は、私が PRE の編集長になる前の副編集長時代にあったことです。前述のように、当時は藻類学会を活性化するいくつもの取組・活動が行われており (Jpn. J. Phycol. 43: 191, 1995)、その一環として、藻類学会の会員が中心となって毎年 1 件ずつ植物学会でのシンポジウムを企画・実施することになっていました。私は予期せず川井さんからすると 2001 年の植物学会はよろしくと依頼されました。多分 2000 年の藻類学会か植物学会の時だったと思いますが、その不意打ちにうかつにも私はおもわずふわっと引き受けてしまいました。それで、私は神戸大学理学部生物学科同期の田畑哲之さん (かずさ DNA 研究所) と 2 人でオーガナイザーとなり、日本植物学会第 65 回大会において「ゲノム時代の細胞外被研究の方向性を探る (JPR Symposium: Toward genomics in cell-covering research)」というタイトルでシンポジウムを組みました (J. Plant Res. 115: 269-307, 2002)。発表

者は順に、田畑哲之さん、保尊隆享さん (大阪市立大学)、私、真山茂樹さん (東京学芸大学)、木村聡さん (東京大学)、西谷和彦さん (東北大学) でした。シンポジウムは成功裡に終わり、私は無事に約束が果たせて心底ほっとしたものです。

このたび、私は日本藻類学会特別賞 (岡村賞) を 70 歳で受賞しました。この記事を書かせていただいたことで、1 つは私が藻類の道を選ぶきっかけとなった卒論生 (22 歳) のときに経験した色々なできごとを懐かしく思い出すことができました。そして 2 つ目は、自分では藻類学会のために少しは役に立てたのではないかと思える PRE の副編集長と編集長 (43-52 歳) のときに行った活動の一部を記録できました。この記事の執筆中、藻類学会で出会ってつながり、ご教示いただいた多くの方々の姿と交わした言葉等がそのときの状況とともに次からつぎへと脳裏に浮かんできました。それらの大切な記憶を心にしっかりととどめ、今まで長きにわたりお世話になってきました日本藻類学会とその藻類学会を熱意をもって支えてきた多くの先輩・同僚会員諸氏のご努力に対し、あらためまして感謝とお礼を申し上げます。最後になりましたが、学生や若手、中堅の研究者が夢中になって独自の研究を切り拓き、それらの活動が連携・競い合いながら幾重も併走することにより、この日本藻類学会が益々盛り上がり、さらに発展していくことを心からお祈りいたします。

日本藻類学会学術賞 (山田賞) を受賞して

藤田 大介 (海藻資源リサーチ)

この度、栄えある日本藻類学会学術賞 (山田賞) を授与していただきました。身に余る光栄です。ご推挙、御審議いただいた先生方、そして、これまでご指導いただいた先生方や先輩方、研究を支えていただいた学生諸氏、官公庁や企業の関係各位に厚く御礼申し上げます。私は学生時代よりこの学会に育てていただきました。受賞会場でもお話しましたが、これまでの歩みを簡単に書いておきますので、ご笑読いただければ幸いです。

私が本学会に入会したのは北海道大学水産学部 (函館市) の 3 年生の時、翌年、水産植物学研究室に入り、大学院にも進学し、正置富太郎先生のご指導の下に磯焼け域に優占す

